

明治時代の生活に学ぶ

第1回

“ちょんまげ”から “ざんぎり”へ

—髪型の変化をめぐる人々の反応—

難波 知子 Namba Tomoko お茶の水女子大学基幹研究院准教授

博士(学術)。専門は、近代日本の学校制服史。著書に『近代日本学校制服図録』(創元社、2016年)、『学校制服の文化史』(創元社、2012年)など。「明治150年」関連施策推進ロゴマーク審査委員。



平成30年(2018年)は、明治元年(1868年)から起算して満150年に当たります。政府では、明治以降の歩みを次世代に遺し、明治の精神に学び日本の強みを再認識するために、「明治150年」関連施策※を推進しています。その一環として本誌では、明治時代を生きた人々の暮らしを振り返り、現代の暮らしを展望します。



今から150年前に始まる明治時代は、欧米から進んだ知識や技術を取り入れ、近代的な国づくりを進めていった時代といえます。その流れの中で、今、私たちが着ている洋服や靴も採り入れられました。和服から洋服への日常着の移行は、髪型や履き物、衣服の素材や作り方、洗濯や収納の方法、衣服をまとう身体や所作、服装に対する美意識の変容を伴いました。

このような大きな変化を明治の人々はどのように受け入れ、自分たちの文化を作り上げてきたのでしょうか。この連載の第1～3回では髪型・履物・衣服に焦点を当て、明治の人々の暮らしぶりをみていきます。第1回は「髪型」を取り上げます。

散髪脱刀令

—“ちょんまげ”から“ざんぎり”へ

江戸時代以前の男性は、時代劇でもおなじみの“ちょんまげ”(丁髷)を結っていました。丁髷とは頭のとっぺん(月代:さかやき)を剃り、残った頭髪を結って髷(まげ)をつくる髪型です。明治4年(1871年)になると、明治政府は散髪脱刀令を出し、丁髷を切り、散髪することを認めます。古い慣習を表す丁髷を切った散髪姿は、“ざんぎり”頭と呼ばれ、文明開化を象徴する髪型になりました。散髪脱刀令自体は、散髪を強

制するものではありませんでしたが、改革推進派の県令(県知事)が派遣された地域では、丁髷が厳しく取り締まられ、散髪が強制されていきました。

このように丁髷を排斥する背景には、開国後の日本にやってきた欧米人の目に、丁髷が未開の地を連想させる奇妙な風習として映ったことが挙げられます。近代的な国づくりを急ぐ明治政府の役人たちは、外国人の目に文明的でないと思える日本の古い慣習を廃止したいと考えました。しかし、男性の中には丁髷に対する愛着や誇りから、散髪に反対する者もいました。今まで慣れ親しんだ風俗を変えることは、そう簡単なことではありませんでした。

“ちょんまげ”の苦勞

さて、人々にとって丁髷や散髪は、どうとらえられていたのでしょうか。水戸藩(現在の茨城県)の武士であった人物のエピソードから、江戸から明治にかけて男性の髪型が変化するようすや印象を紹介したいと思います。

このエピソードの主人公は、青山延寿(1820-1906年)という旧藩士で、女性解放運動の理論家として知られる山川菊栄(1890-1980年)の母方の祖父に当たる人物です。延寿は水戸の藩校(弘道館)で子弟教育に携わった学者でした。

※<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/meiji150/portal/>

孫の菊栄が著した『武家の女性』には、延寿の髪型について、次のようなエピソードが語られています。

若いうちから髪の毛の薄かった延寿は、四十をだいぶ越した今は、もう自分の毛で鬘を結うことができず、禿頭のまわりの毛をびんつけ油で上の方へなであげ、つけ鬘をして、そのまわりの毛を、また下の方へなでつけてもたせておくので、暑いころなどは、窮屈な服装でお城や学校へ出てキッチンと坐っている間に、びんつけ油はタラタラ溶ける、つけ鬘はゆるむ、何ともいえない厭な気持だったそうで、御維新になって世の中が変り、いろいろよくなったことが多い中にも、つけ鬘の苦勞のなくなっただけでも、どんなにホッとしたか分からない、ということでした。

延寿の場合、維新前の鬘結いにとても苦勞したようすがうかがえます。年をとれば、当然薄毛になり、丁鬘を結うことが難しく、それでも体裁を整えるためにつけ鬘をしなければなりません。維新後、散髪が奨励されると、毎日の鬘結いから解放され、楽になったことが容易に想像できるでしょう。このように、旧来の慣習に必ずしも固執する人々ばかりではなく、新しい文化の便利さや実用性を自らの経験に照らして判断し、その結果、変化を受け入れていった人々も数多くいたと思われます。それは政府による「上」からの強制とも異なり、人々の主体的な判断や行動に基づいていたと言えるでしょう。

結髪の苦勞、束髪の便利

女性の髪型についても、延寿の場合と同様のことが言えます。明治時代には、女性の髪型も西洋風の束髪へと次第に変化していきます。江戸時代に発達した女性の結髪は、油で塗り固め、複雑に結び上げるスタイルでした。とても美しい髪型かもしれませんが、髪が量が多くて重い

うえ、髪型を維持するために相当な苦勞が伴いました。夜寝る時も髪型が崩れないように気をつけなければならず、またいったん結うとしばらくそのままなので、しらみが湧いたり、ひどい臭いがすることもあったようです。

これに対して、西洋風の束髪は毎晩髪をほどこいて寝て、朝起きたときに油を使わずに結うスタイルでした。清潔で軽快、かつ髪型が崩れることを気にせずに生活することができました。こうしたメリットを主張し、束髪を勧める運動も起こりました。明治18年(1885年)に婦人束髪会が結成され、西洋風の髪型が紹介、指南されていきます。青山延寿の娘、青山千世(山川菊栄の母)もこの時に束髪に変えています。千世は、束髪がとても軽便なため、周囲からも珍しく見られても、それ以来ずっと束髪で通したようです(山川菊栄『おんな二代の記』)。

新しい文化の受け取り方や実践の方法は人それぞれですが、明治を生きた人々のエピソードを読み込んでいくと、自分たちの経験や感覚を通して、しっかりと判断していることがうかがえ、とても頼もしく感じられます。かつてない大きな変化を経験した明治の人々の物事・文化に対する適応能力に、現代の私たちも学ぶことがあるのではないのでしょうか。

図 明治時代の理髪店 髪型の変容に伴い散髪屋も登場



出典：平出鏗二郎『東京風俗志(中巻)』(1901年、国会図書館デジタルコレクション)